

興道寺廃寺

耳川流域に古代寺院現る!!



かつて耳川流域に存在した古代寺院「興道寺廃寺」。今月号では、その謎に包まれた実態に迫ります。

↑興道寺廃寺を南から望む(青四角内が、興道寺廃寺のおおよその範囲)

興道寺廃寺とは

興道寺廃寺は、7世紀後半から10世紀初め頃まで、興道寺に存在したと考えられている古代寺院のことです。現在寺院の建物は残っておらず、跡地には畑が広がっています。(上写真参照)

この場所の小字は「観音」であるため、地域住民や郷土史家の間では古くから古代寺院の存在が知られていましたが、実際にその存在が明らかとなったのは昭和初期です。福井県園芸試験場を建設する際に古瓦が出土し、その後またたび古瓦の出土が続きました。昭和52年には、県が初めての掘削調査を行い、その際も多量の古瓦が見つかっていました。

町では、遺跡の内容や現存状況を確認するため、平成14年に発掘調査を開始し、これまで全13回の調査を実施しています。

寺院は再建されていた

調査の結果、興道寺廃寺は、7世紀後半から8世紀中頃にかけて建設されていたと考えられています。この間を創建期と呼び、金堂(仏像の安置場所)や塔、講堂(僧侶の修行場所)等が造られました。

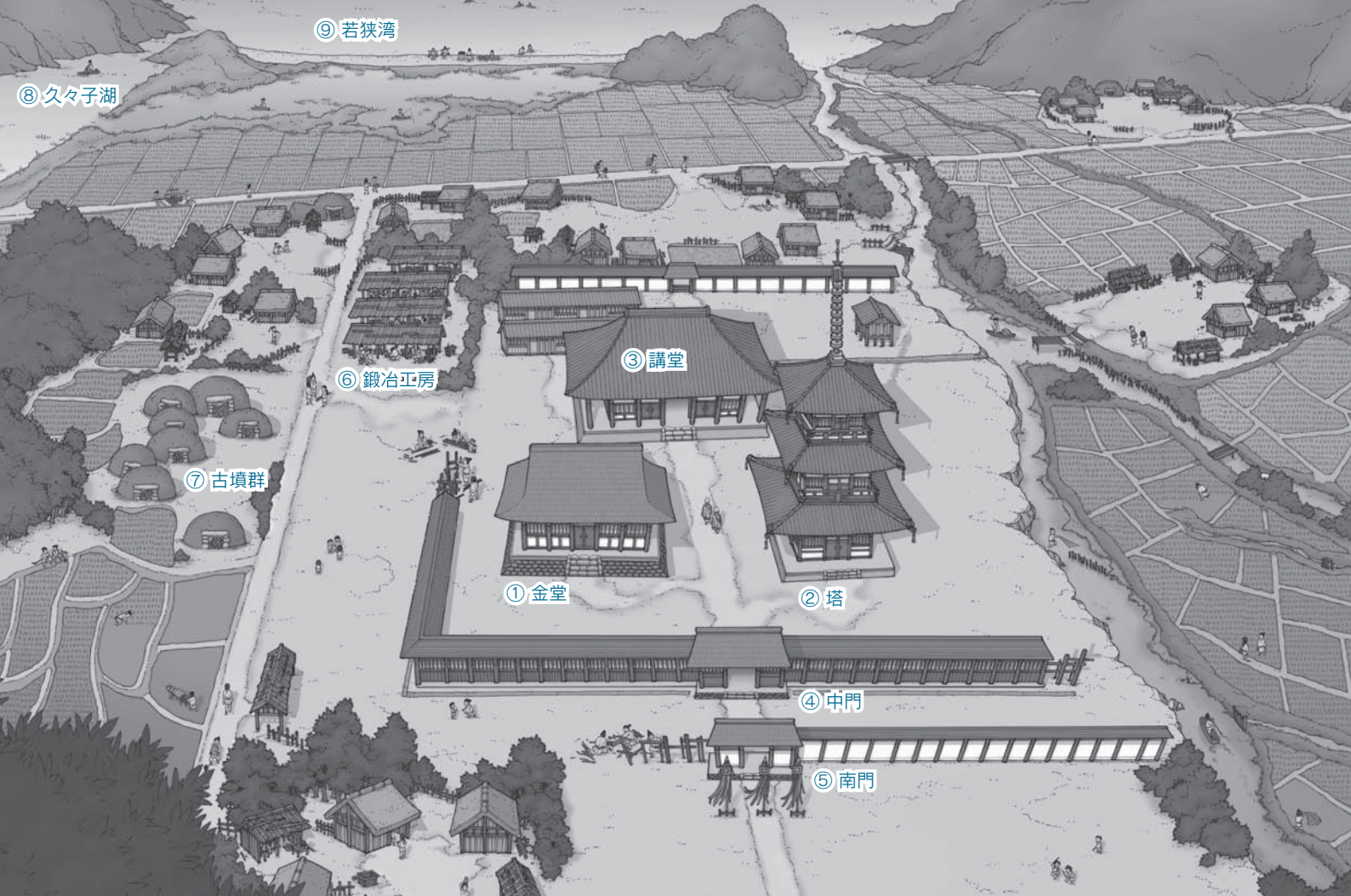
その後、8世紀後半から寺院の再建が始まります。

再建期には、創建期の金堂と塔が解体され、ほぼ同じ場所に新たな金堂と塔が建てられました。また、中門と南門が同じ頃に建設されました。その他、建物跡は未確認ですが、僧坊(僧侶が生活する所)や鐘楼等の存在も予想され、再建期は、七堂伽藍(寺院の主要な建物)を備えた本格的な寺院だったと考えられています。

各建物における基壇(土台)の規模

	創建期	再建期
金堂	南北13.8m、東西16.8m	南北14.1m、東西16.8m
塔	南北・東西ともに12.0m	不明(南北・東西ともに13.5mほどか?)
講堂	南北11.9mほど、東西16.5m	
中門	不明	南北6.1m、東西7.4m
南門	なし	南北4.5mほど、東西7.2mほど

※基壇とは、次頁のイラストで、建物の土台となっている部分のことです。



↑8世紀後半の興道寺廃寺と周辺景観をイメージしたイラスト(南からの俯瞰図)

復元イラストを作成

町文化財室では、これまでの調査結果をもとに、興道寺廃寺とその周辺の古代景観をイメージした復元イラストを作成しました。(上図)

イラストは再建期である8世紀後半のある年の春をイメージしています。

寺院周辺には、鍛冶工房(寺院の建築・修繕に必要な材料等を製造する所)や、当時の道路、条里制に基づき区画された水田、古墳群(豪族の墓)等が描かれています。また、古代の生活風景として、稲作や漁のほか、海岸付近で土器を使った製塩を行う人々の様子も描かれています。

耳川流域の古代豪族

興道寺廃寺のある耳川流域に豪族が現れたのは、5世紀の終わり頃です。耳川左岸に活動の中心を置いた豪族は、興道寺周辺に集落を構え、須恵器(土器)の生産や海岸での製塩等、さまざまな生産を掌握していききました。

6世紀に入ると、こうした豪族は耳川左岸にいくつかの古墳を造り始めました。その中の一つに獅子塚古墳(郷市)があります。この古墳は全長32・5m、

周囲に濠(ほり)をめぐらし、墳丘には円筒埴輪を立てる前方後円墳です。古墳の石室内からは、須恵器や装身具(玉)、鉄製の馬具等が、副葬品として見つかっています。

仏教の伝来と寺院の建立

仏教が日本に伝来したと言われるのは538年。その後仏教は7世紀中頃になると、国の平和と安定を図るための思想・政策として中央政府に保護されていきます。

これにより、全国各地で寺院の建立が盛んに行われました。建立の担い手となったのは、地域の豪族たちです。彼らにとって寺院の建立は、中央との結びつきを強めるだけでなく、自らの権力と財力を地域の民衆に見せつけ、支配を固めるための絶好の機会でした。

興道寺廃寺も、このような時代背景の中、耳川流域で活躍した豪族の子孫によって建てられたものと考えられています。



↑獅子塚古墳 石室(6世紀前半)
福井県立若狭歴史民俗資料館 提供

耳別氏が建立?

興道寺廃寺を建立した豪族を特定する史料はありませんが、有力視されているのは「耳別氏」です。

耳別氏の存在は、奈良時代の国の歴史書『古事記』で確認できます。開化天皇について記述している部分に、開化天皇の孫である室毘古王の末裔として登場します。また、平城京から出土した木簡にもその名が記されており、耳川流域で古墳時代から勢力を維持し続けた豪族の子孫と考えられています。

興道寺廃寺は、耳別氏の氏寺（一族の繁栄を祈願するために建てた寺）ではないかと考えられています。しかし、他の豪族も建立や維持に関わった可能性もあり、今後の調査研究による説明が必要です。



↑ 弥美神社(宮代)は、耳別氏の祖先「室毘古王」を祀っている

興道寺廃寺出土品



①



②



③



④

遺跡からの出土品

興道寺廃寺からは、多くの貴重な遺物が出土しており、その一部は、町指定有形文化財(考古資料)に指定されています。

① 単弁八葉蓮華紋軒丸瓦(I型式)

創建期の建物の軒先で使われた瓦。年代は7世紀後半。

平成17年度の第7次調査で出土しました。

瓦の直径は20cmで、この型は当時建立された寺院でよく使われているものです。奈良・大阪から滋賀県東部を経由し、興道寺廃寺へ伝わったと考えられています。

② 墨書土器

須恵器の蓋。年代は9世紀末から10世紀初頭。

平成21年度の第11次調査で出土しました。

蓋の直径は14cmで、天井部分には「耳」と墨書がされています。「耳」という文字が持つ意味としては、地名、人名、寺名等が考えられます。町指定有形文化財。



③ 銭貨

銅製の銭貨（和同開珎、万年通宝、神功開宝）。年代は8世紀。

平成18年度の第8次調査で、計14点が出土しました。

県内では、1つの遺跡から最も多量に古代の銭貨が出土した事例です。町指定有形文化財。

④ 塑像（螺髪）

土で造られた仏像（塑像）の毛髪部分。年代は8世紀後半から9世紀。

平成20年度の第10次調査から平成23年度の第13次調査にかけて計11点が出土しました。

砲弾形（高さ4 cm程度・底面直径2 cm程度）と、円錐形（高さ2 cm・底面直径2 cm弱）が見つかっています。なお、県内の遺跡で、塑像（螺髪）が出土したのは初めてです。写真の7点は町指定有形文化財。



↑古代の一般的な仏像のイメージ(坐像)

● 予測される仏像の高さ

	坐像の場合	立像の場合
仏像① (砲弾形螺髪)	2.4m程度	4.8m程度
仏像② (円錐形螺髪)	1.3m程度	2.6m程度

※坐像…座っている仏像のこと
立像…立っている仏像のこと

仏像は2体あった

大ききの違う2形態の螺髪が出土したことから、寺院には少なくとも2体の仏像が安置されていたと考えられます。

螺髪の大よきから、仏像の大きさが予測でき、寺院の再建後は、金堂に大きな仏像が、塔にはその半分くらいサイズの仏像が安置されていたと考えられています。



大阪市立大学大学院
(文学研究科)
名誉教授・特任教授
栄原 永遠 さん



京都府立大学
文学部歴史学科
教授
菱田 哲郎 さん

興道寺廃寺では、寺院建立前の6世紀に活動した豪族の居館跡とみられる大規模な建物跡が確認されています。6世紀に豪族が集落を造って、後の7世紀に寺院を建て、さらに8世紀に建て替えるという歴史を辿れる場所は稀有だと思えます。

「耳」と書かれた墨書土器とも関係しますが、興道寺廃寺は約400年にわたって、この地域を治めた豪族の拠点と考えられる遺跡です。

興道寺廃寺は耳別氏をはじめ、和珥氏等のいろいろな氏族が関与しながら、維持運営されていたと考えられます。三方郡に留まらない、若狭全域、近江、あるいは越前までの、もっと広い範囲の人々が関与していたお寺だったのでないかと考えています。

識者が語る興道寺廃寺の価値

興道寺廃寺のこれまでの発掘調査で、それぞれのお堂に対して大規模な建て替えが行っている様子が分かっています。

古代の地方豪族が建てた寺院の中で、活動の過程で手を入れ、もう一度造り直すという事例は、実はあまりありません。寺院の様子がはっきりしてきたというのが本当に実感でき、かつて美浜町にかなり立派な古代寺院があったことが見えてきました。

今後、さらに調査が進み、興道寺廃寺周辺にある雑舎等（寺院を維持するための建物や施設）の様子が分かってくると、地域の宗教的センターとして仏教活動が行われ、経営されていた寺院の姿が、もっと鮮明に浮かび上がるのではないのでしょうか。